

能勢朝次著作集編集委員会編

能勢朝次著作集

第一卷

国文学研究

思文閣出版

能勢朝次著作集 第一巻 国文学研究

定価 6,600円

1985年5月20日 発行

著 者 能勢朝次

発行者 田中周二

発行所 株式会社思文閣出版
〒606 京都市左京区田中閨田町 2-7
電話 (075) 751-1781 振替京都26228

印 刷 株式会社印刷同朋舎

製 本 株式会社大日本製本紙工

最終回配本 3390-023552-3402

国文学概説

I

緒 言	3
-----	---

第一章 日本文学の形態	6
-------------	---

一 詩歌形態文学	8
----------	---

(一) 和歌形態	8
----------	---

(イ) 長歌・片歌・旋頭歌形態	(ロ) 短歌形態
-----------------	----------

(ハ) 短歌の格調・句切れ	(ニ) 歌風の變遷
---------------	-----------

(二) 連歌・俳諧・俳句形態	20
----------------	----

(イ) 俳句の源流	(ロ) 連歌形態	(ハ) 俳諧形態
-----------	----------	----------

(三) 歌謡形態	38
----------	----

(イ) 平安時代の歌謡	(ロ) 中世時代の歌謡
-------------	-------------

(ハ) 江戸時代の歌謡

(四) 新体詩形態	51
-----------	----

(イ) 新体詩の發生	(ロ) 藤村と晩翠	(ハ) 泣菫と有明
------------	-----------	-----------

(ニ) 白秋と露風	(ホ) 口語詩の發生
-----------	------------

二	小説形態文学	61
(一)	平安時代の物語	61
(イ)	伝奇物語と歌物語	
(ロ)	『源氏物語』	
(ハ)	『源氏』以後の物語	
(ニ)	歴史物語と伝説物語	
(二)	中世時代の物語	67
(イ)	前代継承の物語	
(ロ)	新時代を反映する物語(戦記物語)	
(三)	江戸時代の小説	71
(イ)	仮名草子	
(ロ)	浮世草子	
(ハ)	洒落本・人情本・滑稽本	
(ニ)	絵入り小説(黄表紙・合巻)	
(ホ)	読本	
(四)	現代の小説	77
(イ)	自然主義以前の小説	
(ロ)	自然主義の小説	
(ハ)	反自然主義および自然主義以後の小説	
三	随筆・日記・試論形態文学	84
(一)	日記文学	84
(二)	随筆文学	88
(三)	試論	91
四	戯曲形態文学	91
(一)	中世時代の戯曲	92
(イ)	能楽・謡曲	
(ロ)	狂言	

(二) 江戸時代の戯曲	96
(イ) 人形浄瑠璃	
(ロ) 歌舞伎劇	
(三) 現代の戯曲	103
(イ) 歌舞伎系	
(ロ) 新派劇	
(ハ) 新劇	
第二章 日本文芸の理念	105
一 上代の文芸理念——まこと——	106
二 平安時代の文芸理念	109
(一) あわれ	110
(二) おかし	111
(三) 優	112
三 中世時代の文芸理念	112
(一) 幽玄	114
(二) 寂び・冷え	116
四 江戸時代の文芸理念	119
(一) 伝統的理念の再生	120
(イ) まこと	
(ロ) 風雅	
(二) 町人文芸の理念	122
(イ) 粹	
(ロ) 通	
(ハ) 虚実	

(ニ) おかしみ (ホ) 勸善懲惡

五 現代の文芸理念 128

(一) 思想界の傾向 129

(二) 文芸上の主義 130

(イ) 写実主義 (ロ) 浪漫主義 (ハ) 自然主義

(ニ) 反自然主義 (ホ) 社会主義

第三章 文芸受容の様相 136

一 詩歌文芸の受容の様相 137

(一) 短小なる詩形の愛好 137

(二) 余情の尊重と象徴的表現の愛好 139

(三) 表現の二重性への趣味 140

(四) 自然美詠歎への傾き 143

二 小説文芸の受容の様相 146

(一) 婦人の慰安遣悶の具として 146

(二) 歴史物語と批判的見方 147

(三) 流転的人生への宗教的関心 148

(四) 人生訓的受容への関心 149

(五) 娯楽慰安と戯作的傾向 150

中世文学美

一 文学美と時代との問題	167
二 中世文学美を生むもの	169
(一) 中世文学美の主流	169

Ⅱ

(六) 文芸批評的鑑賞と哲人的鑑賞	152
(七) 日本小説と思想性の問題	152
三 戯曲文芸の受容の様相	154
(一) 芸中心の鑑賞	154
(二) 能楽——幽玄なる芸能の愛好	156
(三) 歌舞伎——性的魅力と芸の魅力	157
(四) 脚本作者の地位と芸中心の脚色	159
(五) 歌舞伎美と芸道修行	160
四 随筆・日記文芸の受容の様相	162
(一) 日記文芸の受容	162
(二) 随筆文芸の受容	163

(一) 中世文学美の心地修行の重要視	170
(三) 中世文学美と道の精神	173
三 中世文学美の様相	176
(一) 幽玄美	176
(二) さび・冷え・やせ・からび	179
(三) 不明体・水味・無心・無文	181
四 中世文学美と無所住心	185
中世文学相の断面	187
第一章 緒言	187
第二章 中世文学相の断面	192
一 構成芸術的傾向	192
二 芸術に対する態度	195
(一) 道の意識と専門道の発達	196
(二) 型による修練と鍛練道	198
(三) 宗教的傾向と作品超越性	200
三 新興階級の要素	202
(一) 啓蒙的傾向と娯楽的傾向	202

道と型との文学

(一)	素朴性の発現	204
(二)	英傑崇拜と実力讃美の精神	205
(三)	会合共楽的性質	205
(四)	道と型との文学	208
一	道と型との文学	208
二	道	210
(イ)	道と家	210
(ロ)	道の人	211
(ハ)	道の性格	213
三	型	214
(イ)	型の性格——模範と規範	214
(ロ)	型の意義	218
(ハ)	型による学習	219
(ニ)	文芸における型	221
四	習道	224
(イ)	習道の心得	224
(ロ)	習道次第	227

五 道に入る心——教寄・醉・執心——	233
六 心地の修行	236
(イ) 無常の觀念	237
(ロ) 無所住・流行	239
(ハ) 離俗	242
(三) 閑居幽栖・行脚	244
七 秘伝の問題	245
中世に秘伝・家伝の生まれたのは何故か	250
「かかり」の芸術的性格	256
一 連歌論における「かかり」	259
二 能楽論における「かかり」	263
(一) 姿態演技方面の「かかり」	264
(二) 音曲方面の「かかり」	267
(三) 「かかり」の獲得と無	279
(四) 体用より見たる「かかり」	282
(五) 「かかり」の語義の問題	284
貞和時代の『曾我物語』	288

Ⅲ

学界動向所感	297
本格的研究へ驀進せよ	308
国文学界は如何にあるべきか	311
一般鑑賞論	317

Ⅳ

『室町能楽記』を讀みて	331
山本東次郎氏著『間狂言の研究』を讀んで	335
『新古今の歌人』の著者への手紙	340
瀬原退蔵著『芭蕉俳句新講』	342
津田左右吉著『日本文芸の研究』	346

V

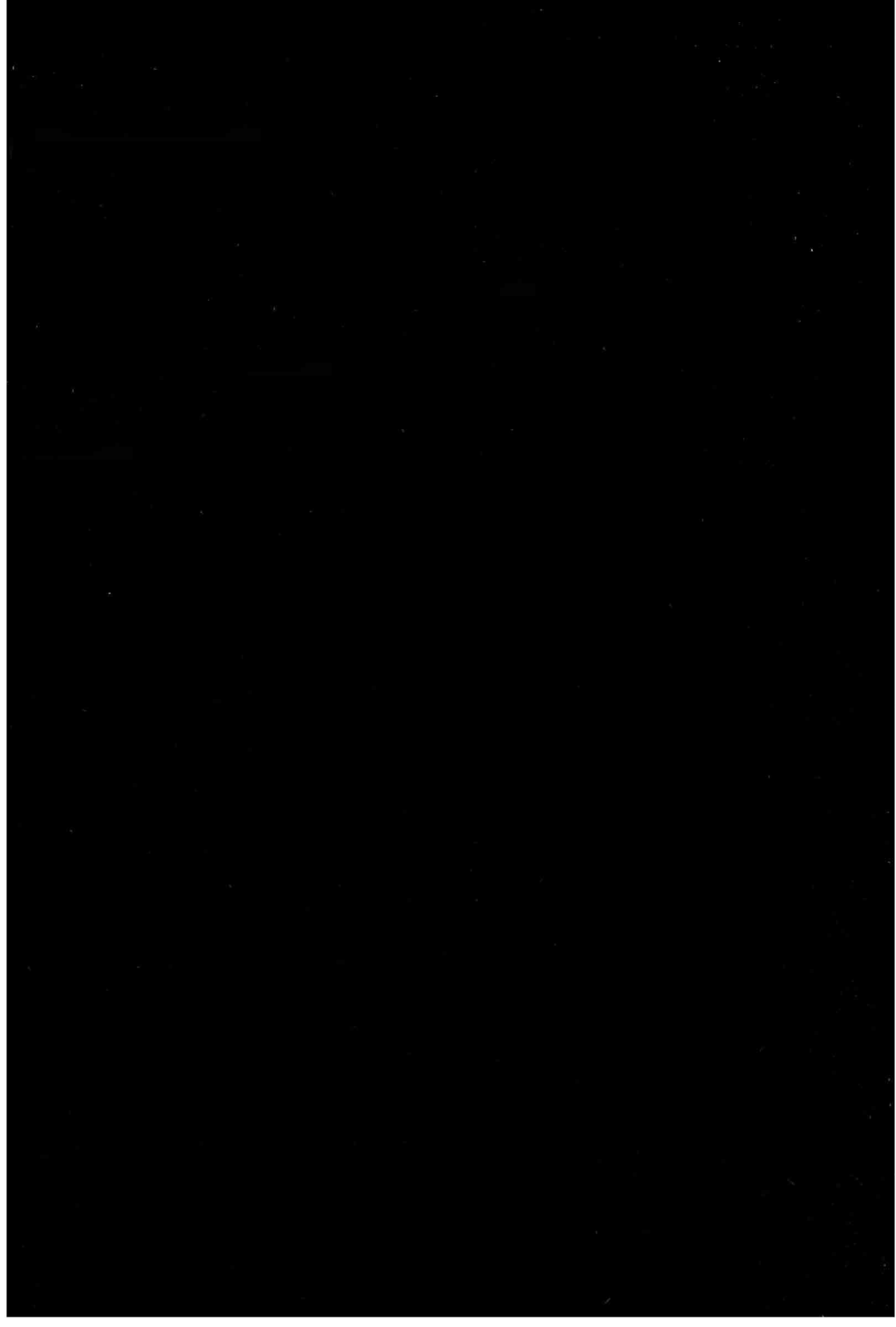
小沢健雄君を悼む	353
坂元雪鳥さんを憶う	355
吉田弥平先生	358
観世左近師を憶う	361
野上先生を悼む	364
解説	367
略歴	392
著作目録	396
講義題目	424

(小西甚一)

◇装丁

粕谷

弘



国文学概説

緒言

国文学を概説するにあたって、もっとも実際的な方法は、国文学を、詩歌・物語小説・戯曲等の文学の形態に分類して、それぞれの形態について論じてゆく方法である。それは、文芸を創作する立場から見ても、これを鑑賞し受容する立場から見ても、いずれも、ある文学形態の立場に立つて、創作もし鑑賞もしているという事実、一番に即しているからである。作者は、文芸一般を創作するなどというのではなく、歌を作るならば歌人として、小説の場合ならば小説家として、歌を詠み小説を書くのである。また鑑賞する側においても、歌は歌として小説は小説として鑑賞し批評しているのである。だから、形態を離れて文学一般を論ずることは、少なくとも論として切実さを失うことになる。それで、本書は形態論からはじめた。

各形態に分かつて論ずるとして、次に起こる問題は、それぞれを概論的に述べてゆくべきか、それとも歴史的な展開の相において述べてゆくべきかであろう。それは、勿論いずれかでなくてはならないというごときものではなく、論者の好みにまかせて良いが、概論的に述べてゆく時には歴史的展開に関しても顧慮をほらい、歴史的な叙述をする

際には概論的な視野を持たなくてはならないと思う。私は、大体、各形態に分かつて、歴史的展開の順にしたがって簡単な文学史的鳥瞰図を描くことから始めた。それは、国文学史についてまだ十分な知識を持たない人々には、この方法が理解し易かろうと思ったためである。しかし、本書は国文学史ではないから、説いて詳細でないという点は免れない。

各形態によって、文芸は創作せられ鑑賞せられるものであるが、作品が歴史的に発展し展開してゆくということには、それぞれの時代の芸術思想の推移変遷ということが大きい力を及ぼしている。中でも文芸に対する理念ともいべきものの推移は、時代精神の移り変わりとともに、国文学に時代的な特色を生みだす大きな力となっているのである。そしてその理念は、大体その時代の各種の文芸形態に共通的なものとして現われているので、その立場から本書の第二章ではこの文芸理念の変遷を中心として、国文学全般の時代的特色を語ることとしたのである。

また、文芸の発達や展開においては、作者の創造的な天分によることもっとも大であるが、そうした作者を生みだした社会的環境の一つとして、文芸を鑑賞し受容する者、いわば読者や観客の文芸受容に対する態度というものが重要視せられなければならないと考える。従来の文学史においても時代時代の社会的・思想的な環境についての記述が試みられているが、主としてそれは作者の精神に及ぼした影響という面において語られていて、鑑賞者がどのような態度で受容していたかという点にはあまり触れられていない。しかし、作者を鼓舞したり天才を出現させたりするもっとも直接的な力として、鑑賞者の態度如何ということは、もっと顧みられても良いかと考える。そうした考えから、本書の第三章は、文芸受容の態度如何ということを中心問題として、文芸形態別にいささかの説述を試みたのである。